

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから20年④

この2016年も8月13日～23日、タイに行ってきました。いつものごみ(中込貴芳)、ごめ(中込卓男)のほかに、20代の贅田隼人(だにえる)さんが参加しました。昨日のことを思い出すのも困難なぐらい毎日が新しい体験の10日間でした。次号の「ナマステ」で、活動報告が寄稿される予定です。なお、10月8日から10月16日までタイ・ラジャバト・プラナコーン大学のラダワン先生、シリワット先生が院生や学生を連れて総勢8名で、来日されます。都心と小菅村を中心に環境学習にかかわる研修をされます。案内するボランティアスタッフが不足しています。お手伝いくださる方は事務局までご連絡ください。(かつてな編集人 中込卓男)



▲クアーンサラオのカレン族のルン・ボヨーさんに畑と栽培している植物を見せていただいた。

タイの鳥 III

若林 卓司 日記より

2006年8月21日

ラーチャパット・プラナコーン大学でゴミさん、ゴメさん、それに後から合流した菱井くんと待ち合わせ。シリポンさんの奥さんのポータンさんとラームさんにウタイタニーから迎えに来てもらう。途中でスパンブリーにある「水牛村」と「100年市場」に寄る。水牛村ではバンコクから来た小学生と共に水牛のショーを見、その後で水牛二頭が引く車にのった。自動車では難儀する泥道でも楽々進むので驚いた。

100年市場はラマ7世時代の徴税吏の家を中心に、ターチン川沿いにできた市場ということだ。スパンブリー出のバンハーン元首相と同じような顔のよくしゃべる人が案内してくれた。夕方にシリポンさんのパンダキャンプに着いた。彼が副理事長を務める職業学校から、理事長もみえて一緒に夕食。テントに泊まる。

8月22日

シリポンさんの学校を案内してもらってからフォーワイカイケーン鳥獣保護区に行く。ラームさんが同行してくれた。シリポンさんの手配のおかげで研究者用の建物に宿泊できた。昼食の後、ヒンデー自然観察トレールを職員のソムチェートさんの案内で歩く。ヒョウ、トラ、ゾウの痕跡があ

ちこちにある。教えてもらわねばわからないのだが、宿泊地の近くにいろいろな動物が出没しているので驚いた。野鳥に興味を持つゴメさんに初めての鳥がたくさん見られたり、ツノゼミの写真が撮れたりしたのがよかった。戻ってから、スー・ナカサティアンの像にいき、嘗て彼がこの鳥獣保護区の所長として生活をしていた宿泊所に行く。もう、16年前になる彼の死を契機としてタイでは自然保護運動が力を持つようになるが、ずい分皮肉な成り行きだったと今でも思う。この近くにもトレールがあるので、そこに入る。ここで私にもポンティップにも二度目になるミカドバト (Green Imperial Pigeon) を見た。



夜にはシリポンさんの知り合いの、ここでレインジャーを29年やっているというフーンさんと

奥さんがやってきて色々話をしてくれた。フーンさんは昔、狩りをしたというが今は真剣に自然保護の職務に励んでいるという。スーブのことを話してくれたので、私はスーブの死の原因を聞いてみた。結局、はっきりしたことは言わなかったけれど、鳥獣保護区から不法に利益を盗み出そうとする地方のボスや政治家に多くの敵を持っていたことだけは話してくれた。途中で私はシャワーを浴びたので、ポンティップが通訳を代わりにしてくれたが、なんとか役には立ったみたいだ。9時に発電が止まってしまう、真っ暗な中でさらに色々話を聞いた。私たちが泊っているところは昔、トラがよく出たところだというし、ヒョウは今でも出るというので、10時過ぎに寝床に入ってから、再び12時ごろに起きだして、懐中電灯で辺りを見回したが、何にも出会わなかった。

8月23日

朝、宿泊所の回りを探鳥した。ラームさんが巣から落ちたヒナを見つけた。巣立ち前のヒナだがほっておけないので、近くの木の高さの3メートルほどの高さにある巣に身軽な菱井くんが帰してくれた。



何の鳥だかよくわからなかったが、しばらく離れてみているとオニグロバンケンモドキ (Green-billed Malkoha) が巣に入った。鳴いていたヒナの声も鳴きやんだ。私たちは、その後出ていった親鳥がもう一度巣に入るのを確認して

から、朝食を食べに行った。



朝食後、今度は研究者用の「トラの家」トレイルにソムチュートさんの案内で入った。ここにはヒョウ用とトラ用の罠が仕掛けられていた。掛かれば発信機を取り付けるのだという。また、ゾウが出没した跡が生々しかった。帰ってからトラの発信機を取り付けるための捕獲やこの鳥獣保護区についてのビデオを見せてもらった。その後私たちはフーワイカーケンを後にして、まず、「フック・パー・タート」と呼ばれている石灰岩の岩塊に取り囲まれた空間に生えるヤシの林に行った。以前はここへは上からロープを使って懸垂下降をするしかなかったと思うが、今は洞窟をくりぬいて道が作られている。このヤシの実実は「ルーク・シット」といってタイ式のアイスクリームなどには入っているやつである。ここを見学してからランサックという中・高等学校へ行った。

この学校のすぐそばの洞窟にコウモリが生息していて、この学校ではこのコウモリを題材にして環境教育を行っているという。その話を先生に聞いた。その後、一緒に食事して、戻ってきたときには、コウモリは洞窟から次々に飛び出していたが、長い帯になって、波状を描き、途切れることがなかった。百二十万匹と推測されているらしいが、なかなか見事なものだった。でもどうやって元の洞窟にもどってこられるのだろうか。

パンダキャンプに戻り、遅くまでシリボンさんと話した。私もそうだがみんなも足がとてにもかゆいという。赤い斑点があちこちに出ている。フーワイカーケンにはリンがいると聞いていた。メーウォンでは悪辣なブヨをリン・ダムと呼んでいるので、ブヨのことだとは思っていた。しかし、メーウォンでは夕暮れになるとこのブヨは活動しなくなるので、フーンさんが来たときも、誰も用心

せず宿舎の玄関先で話した。この時にやられたのだと思う。ゴメさんの持ってきた塗り薬でかゆみはとれたが、とんだ油断である。テントで寝る。

8月24日

今回のメインである。日本側が用意してきたペットボトルで顕微鏡を作る作業を生徒に教えるという初めの予定を変更して地元の先生に教えることになった。先生は全員で11人。結果に誰も満足されたようだった。その間、一緒にやってきた小6と中1の生徒には菱井くんとポンティップがかぶとを折ったり、ドラえものの歌を歌ったりして時間をつないでくれた。



▲いつもお世話になっているエーさんとポンティップ若林さん

ペットボトルで顕微鏡を作った残りで丸いわっかを作り、一方の端にビニールテープを巻き付けて、うまく投げると結構飛ぶ。時間がなかったので顕微鏡作りは学校での先生の指導に任せて、生

徒とはこのわっかのとばしあいをして遊んだ。



このわっか飛ばしの合間に生徒たちのサイン攻めにあってしまった。先生も学生もパンダキャンプで昼ごはんを食べて、昼からの授業に戻っていた。私たちはラオ・ヴィエンの集落へ行った。ここはラオス人の集落で、ラームさんの家もここにある。



▲ラームさん

最初の家でマークの木の収穫を実演してもらった。日本でキンマーといっているものだ。わっか状のものに足を入れて、それを細い幹に巻き付けるようにして登る。そして上部の房状についた実をわっかにはさみこみ、いっぱいにならなかつたら、他の幹に移って、足元をいっぱいにして降りてくる。20メートル近く、細いマークの木に登るので、下から見ていると危うい感じがする。菱井君が挑んだがほとんど登れなかった。近くの家に行っておばあさんにマークの噛み方を教えてもらった。



私は田舎にいたとき何度もマークの実を噛んだことがある。乾燥させたマークの実の薄切りにブルーの葉と石灰も少し口に入れるのだが、この石灰には最後までなじめなかった。試みた3人もそうそうに吐き出していた。この後、100年ほどの古さを誇る家に行ったり、織物のおばあさんを訪ねたりした。見学はこれで終わらなかった。再び近くのプ・トイ鍾乳洞へ行った。中が大きな洞になっていてきれいな鍾乳石がたくさん見られた。前日行った「フッ・パー・タート」では外国人は一人200パーツをとられた。私はルーム大の証明書を出してタイ人扱いになったが、こんな片田舎を訪れる数少ない外国人に、この扱いはいただけない。それで、ここでも同じようにとられるのかと思ったが、係の人に先導してもらって、私たちはライト代として一人20パーツを払っただけだった。この日、さらに三人はマッサージに出かけた。遅い夕食を済ましてから、私たちはシリポンさんと夜が更けるまで歓談した。

8月25日

今日は夕方にはバンコクに戻らねばならなかった。朝、パンダキャンプでシリポンさんと一緒に、持っていった木を植えた。それから、ポータンさんとルームさんの案内でカレン族のイーサーイ村に行った。ここにいるボランティアの「あき」さんに会えればよかったが、去年に続き今年も振られてしまった。しかし、カレンの人の信望が厚いのがよくわかった。この村は最近、ゴムの生産を始めたといい、貧富のさが現れてきているようだった。織物をしている女の人のところに行

って色々質問をした。そこの旦那さんがモグラ取りの仕掛けを見せてくれた。私たちはカレンの織物がほしかったが、カンペンペットで山岳民族の運動会が行われていて、そこで売るために「あき」さんがすべて持って行ったそうで、村には何も残されていなかった。その後、さらに奥にあるチャオ・ワット村まで行った。しかし、肝心のチャオ・ワット（シャーマン）がいなかったのでチェディーを見せてもらうことが出来なかった。帰りにバーン・プ・ボーン小学校へ行った。



生徒が40人ほどで先生が二人の学校だった。生徒の家庭が貧しく、また、一学期の予算が一万パーツちょっとで、とてもやりくりが大変だと先生が話してくれた。一棟の建物の二階に職員室、1・2年生、3・4年生、5・6年生が一緒になった教室の区割りを作っているだけで、空いているところに給食用の寺からももらった米俵が積み上げてあったのが印象的だった。裏にはとうもろこし畑が父兄の協力で耕やかされていたが、この前の収穫では一万パーツほどの収益があったそうだが、肥料代やその他を引かれると手取りがほとんどなかったそうだ。結局、ゴミさんが東京の自分たちの会を代表して、全校生徒の前で寄付を行った。帰ると名前を忘れたが学校の理事長が待っていて、顕微鏡の作り方を教えてくれという。かなり、大きな動きになってきているんだなと思った。昼食はカレンの村で買ったシイタケの炒め物が出た。これはなかなかおいしかった。最後に祭りをやっているシリポンさんの学校にもう一度寄って、バンコクを目指した。プラナコーンに着いたのは7時半ごろになったが、シリワット先生とチンナタット先生がまってくださって、新しくできた大学の食堂で夕食を誘ってくださった。

ホテルについていえば、水際族がフーワイカーケンで一匹、マドポタルがパンダキャンプで一匹とれた。
(終)